Reライフ LIFE

人生充実

そばに置きたい

美しく実用的な粗陶器

岡山県倉敷市の大原美術館で1978年、染色家の故・芹沢銈介氏のコレクション展が開かれました。各国の美しい品々の中に、小鹿田焼の柳瀬朝夫さん作のすり鉢がありました。

実用品の粗陶器が美しい収集品の中に置かれていることに、私は大きな衝撃を受けました。民藝に対する目が見開かれる思いがしました。

小鹿田焼の窯元は大分県日田市の山奥にあります。現在10軒ある窯元は、300有余年の間、それぞれ一子相伝で技術を受け継いできました。

白い化粧土に素朴な模様や文様を施しているのが小鹿田焼の特徴です。すり鉢をことさら美しく見せる必要はないのですが、柳瀬さんはあるとき誤って化粧土をかけてしまい、そのまま櫛ですり鉢の目立てをしたところ、偶然模様になったそうです。民芸品の本来の美しさとは、自然と伝統の技、偶然が重なって生まれるものです。

サイズは6寸（直径約18センチ）から尺2寸（約36センチ）まで。底が大きく安定しています。片口なので、すりつぶした物を移しやすい。私は山芋やゴマをすりつぶすのに使っています。美しいのでそのまま食器として使えます。ホウレンソウのゴマあえもこのすり鉢に盛って食卓に出すと、ぐっと映えますね。

小鹿田焼のすり鉢（柳瀬朝夫作）　写真は8寸のもので税込み5040円。取り扱う店は柳瀬さんの窯元（0973・29・2440）に問い合わせを。外山亮一撮影

久野恵一　手仕事の良さを伝える団体「手仕事フォーラム」代表。神奈川県鎌倉市で民芸品店「もやい工藝」を主宰する。